

生活の変化と

家庭科教員養成の課題

柳 昌子

はじめに

家庭科の役割を一言で表現するとすれば、主体的な生活者の育成ということである。日本家政学会によれば、生活者には生産者・プラス消費者の意味があり、プロシューマーと英訳されている。家政学や家庭科教育学で生活者という用語を頻繁に使用するようになったのは、生産者主導の物中心主義、あるいは経済優先の効率主義から脱して、生活を営む側から生活文化を創造するとともに、その担い手を育成する上で、生活者という用語が相応しいと考えられるからであろう。

高校の家庭科が男女共修になったということは、このような生活者の育成に男子高校生も加えられるようになったということである。その経緯や小中、高校の教育実践はすでに報告されているので、ここではそれとは別の視点から述べてみたい。

一、生活をとりまく便利な環境

なぜ、今、家庭科の共修かということについて私
なりの整理をしておきたい。「お手伝い」をしたら
賞賛され、もっと、もっとと促された時期を過ぎる
と、「受験」と「部活」の切り札の前に親子ともど
も「お手伝い」に無関心になる。よく識者から現代
の家庭の教育力は衰退していると指摘されるが、実
際には教育費の支出や親の教育的関心は、「現代」
以前に比べてはるかに高い。にも関わらず教育力が
衰退しているというのは、家庭が自身の担うべき教
育の分担に力を入れていないという点への批判に他
ならない。多くの場合支払われる教育費も教育的関
心もともに、家庭が担うべき分担に対してではない
という訳である。

以前はそうではなかった。這えば立て、立てば歩
めの親心。これは幼児の成長を待ちに待つ親心を表
現したものである。親たちは一つの課題が達成され
ると次々と新たな課題を示し、子どもがそれを達成

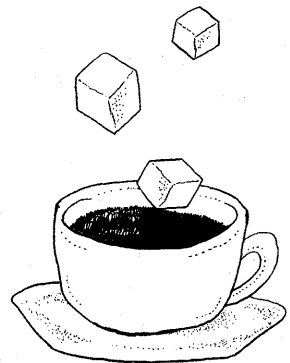
していくことを喜び願う。

このような課題の中に、いつ頃からか身近な生活
処理技能の育成のための教育、つまり「お片付け
（自分の身の回りの整理整頓）」や「お手伝い（家
事参加）」が、またそれと並行して家業を継ぐため
の、あるいは糧を得るための労働教育も含まれた。
一方、家族の間や近隣間での付き合い方など社会的
能力についても、親たちは細かに目配りした。しか
も到達度の評価基準を次第に高めながら練習を繰り返
させ、やがてその社会の中で生きていけるような
一人前の労働者や生活者として育て上げていった。
親たちのこのような活動は、半世紀前まではわが国
の社会で普通に行われていた。以前と比べてという
場合の以前とは、このような時代のことであろう。
現代は、自給自足的な社会のように衣食住を自分
自身で、あるいは身近な補助者の手を借りて賅わな
ければならないという状況ではなく、一人立ちする
時もそれほど覚悟を必要としない。よほどの田

舎でない限り、便利（コンビニエント）な生活関連の店々が昼夜分かたず営業しており、いわゆる「家の手伝い一つしたこともない人間」でも、一人になった翌日から難なく住んで着て食べていくことができる。そこに「習わなくても生活できる」という意識が生じる。すなわち幼い頃から家庭でしつけられなくても、また、学校でわざわざ学習しなくても、何の不便もなく生活できるような気になる。男子だけでなく女子だってそう思うだろう。

二、家庭科の役割

しかしそれはどのような「生活」なのだろう。社会科や国語など学習しなくても暮らしていけるというのと同じことで、それは習わないで暮らせる程度の「生活」に他ならない。カード破産、育児ノイローゼなどに陥る状況を見つみると、何とかなると始めた生活が必ずしも巧くいくとは限らないことがわかる。高度な商品化社会の中での商品選択、錯綜



する膨大な情報の中での意思決定、原料や添加剤、製造過程のわからない食べ物など、暮らしの仕組みはかつての社会とは比べものにならないくらい見え難く、また複雑になっている。現代では、知らないで生活するということは、自分の命を縮め家庭を崩壊させるだけでなく、他人を傷つけ自然を破壊させる可能性をもつということである。

自立した生活者というのは、これらのことを知

り、適切に対処出来る能力を有している者のことを指す。家庭科がその能力を養成すると言えば、変動の少ない時代の家事・裁縫のイメージとはかなり違うことが理解されるだろう。そのような家庭科の男女共修である。

三、技能学習や実用主義批判の再検討

共修になって具体的な実践報告がなされるようになり、いくつかの課題が出てき始めた。一方では家庭科は物作り教科ではない、科学に基づく教科だという主張のもとに、生活の原理や原則を理解させるためと称してやたらと実験が繰り返されたり、経済学や法学や社会学のテキストなどから引用・抜粋した資料が配布され、生活問題や社会問題の講義が行われたりしている。他方には男子が喜ぶからという理由で、彼らの機嫌を取りながら毎回調理実習を行っている教師がいる。そして、男子は乱暴だとか、基礎が出来ていないから教え難いという理由

で、男子クラスを担当したから「ベテラン」といわれる教師がいて、新任や若手教師にまかせてしまっている学校がある。

もう少し学習主体である子どもたちについて丁寧に調べ、彼らに適する教材を開発したらどうだろう。先に述べたように家庭の教育力の衰退から、子どもたちの身辺処理の訓練は小学校時代で中断され、部分的にも全体的にも生活を営む能力は著しく低い。しかし、よく観察すると技能習得の学習自体を嫌っているわけではない。家庭科の共修は、「技能主義でない技能の教育」について見直す機会である。同じく家庭科の実用主義を批判した「今役立つ教育は、将来役立つでない。だから原理や原則についての学習を」というスローガンも少し修正して、「学習したその日に役立つ、青年期に一人立ちする時も、働き盛りの時の自己管理にも、高齢期を迎えても役立つ学習を」、に変更して教材開発していったらどうだろう。共修は、教師の力量と教材の質を

点検し、それらを高める活動とともに開始されなければならない。

四、教員養成の課題

教員養成のための教科専門科目である「家庭科教育研究」の最初の授業で、学生に家庭科観を尋ねてみると「家庭科＝主婦準備教育」観が主流を占める。それを通して彼らが受けた過去の家庭科の状況が彷彿される。まずは家庭科教師自身が「女への女による女のための家庭科」観から自由になる必要がある。また、中学校や高等学校で共学に難色を示しているのが受験科目を担当する教師や、新たな施設設備を整えなければならなくなった経営者である場合が多いことを考えると、家庭科の担当者は家庭科が、理科や社会と同様に普通教科の一つであること、を外部に積極的に理解させる努力をしなければならぬ。

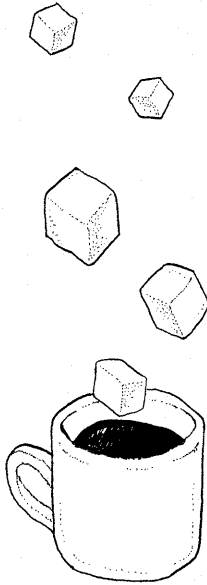
そのためには現場教師の意識の切り替えを言うだ

けでなく、教員養成における課題があることがわかる。小、中、高校の家庭科の現場でさまざまな教育実践が試みられるように、教員養成の現場でも教育内容の検討や教材・教具の開発の努力が行われている。ここでは私のささやかな実践を紹介しよう。

教材研究は、大学生自身が生活者であることを自覚する作業から開始する。漫然と見ていては気づかないような生活の仕組みを、やや非日常的な作業を通して極端な形で暴いてみる。そして関心をもった生活事象から一つの課題を設定し教材化を試みる。教育内容を整理する段階で小、中、高校の教科書や参考書に目を通し、対象学年を特定しながら目標を定め、学習方法を工夫する。これらの作業は学生四七人による班活動で行い、授業のなかで逐次発表する。①から⑤までは一クラス四〇名から六〇名の一環である。(一)内は対象学年と作成班の学生数である。

①買い物の計画の必要性——「五人分のカレーライ
スを作ろう」

献立表を持たず、店内で思いつくままに材料を購
入する場合と、買い物計画表を作って行った場合、
どのような違いがあるのだろうか。それを調べるた
めに近くのスーパーマーケットで実際に買い物を
し、所要時間と動線と費用の三つの項目で測定し数
字を比べた。買い物係は他班の学生に頼んでいる。
発表は教室の中に店内の売り場を模造紙で再現し、



買い物行動を役割演技した。計画していない場合の
ウロウロ姿と、結果としての三つの「無駄」が誇張
されて演じられると、学生たちは笑いながら頷いて
見ていた。動線の違いは二色の紙テープの長さで示
された（小学六年用・女子二名、男子三名）。

②現代の食事には柔らかい物が増えたが、歯の健康
を考えて再検討する必要があることを知らせる——

「君は頼朝の食事が食べられるか」

卑弥呼の時代と現代の平均食事時間、及び食べ物
を噛んだ回数と平均値を比べると、五十一分・三九
九〇回数と十一分・六二〇回数（神奈川県歯科大資
料）になる、という資料の面白さに触発されて、近
所の歯科医から最近の歯をめぐる状況について取材
し、教材を作成した。発表はまず文献に基づいて源
頼朝の食事を再現し、班員で食べ、食事時間や噛む
回数を調べ、それを学内食堂の定食の場合と比較し
表にまとめた。そして現代の食材料や調理法につい

て注意を喚起した（小学五年用・女子七名）。

③ 廃棄を考えた購入——「この机、三年後のゴミ？」

下宿先の自分の部屋にある全ての備品や持ち物に「〇〇年後のゴミ」の札を貼る。菓子袋の「十秒後のゴミ」から、自分自身に貼った「六十二年後のゴミ」まで部屋中「ゴミ」の札だらけ。地球環境を考えると、廃棄は自分個人だけの問題ではないとすれば、購入時も慎重にならざるを得ないこととか、使用目的が終了するまえに、無造作に廃棄していたことに気づき、その理由を考え教材化した。発表は作成した紙芝居で行った（中学一年用・女子三名）。

④ ゲーム作りを通して自分のライフコースを考える。——「人生すごろくを作って遊ぼう」

教育実習で中学生に将来の生活設計を書かせたところ、結婚までは予想していろいろ記入するもの

の、その後が続かず、参考書のライフサイクル例を丸写しし、その他に何も書くことがなく困っている子どもたちを見て学生はショックを受けたという。

自分が未だ経験していない年代の暮らしについて興味関心が深まるように、しかも押しつけでなく子どもが自分から調べてみたくなるように仕向けるため、遊ぶことよりも調べて作ることに重点を置いた教材作りをした。中学卒業以降の年代を四つに区切り、模造紙の上に引かれたコースのそれぞれの区切りごとに喜びの札、悲しみの札、節目（分岐点）の札を必ず一枚以上貼ることにする。札の内容は新聞や雑誌の人生相談欄や家族からの取材で考える。彩色イラストで美しく仕上げた。発表はルールを示してゲームをさせた（中学三年用・女子三名）。

なお、中学生にこのすごろくで実際に遊んでもらった結果、「男子が作った人生すごろくで女子が遊ぶ」「女子が作った人生すごろくで男子が遊ぶ」と面白いだろう、という意見が出た。男女相互理解

の手だてとしても面白そうなので検討中である。

⑤妊婦と住居——「階段下りるのが怖い—お腹の大きいお母さん」

別の班が幼稚園から中学校、図書館から美術館、レストランや下宿などいろいろな所の階段を調べてきて発表したことに触発されて、妊婦になって階段の昇り降りを模擬体験することにした。約四キログラムの砂入り人形を作り、デニム地でつくったエプロンのポケットの中に一キログラムの砂糖袋三個とともに入れてしっかり縛り、キャンパスの中を散歩した。階段のこと以外に、和式トイレの不便さ、廊下が狭くロッカーの置き方が悪い、階段の数が多く急だとか休憩する場所が欲しい。また一般学生の歩き方が乱暴だといった報告も付け加えてあった。発表は体験に基づく感想が中心だったが、ハンディキャップ者と住まいについての問題意義を膨らませていた(小学六年用・男子二名、女子四名)。

なおこの教材はこの後、さらに検討が加えられて題材名「十三年前のお母さんになって」となり、附属中学一年の家庭生活領域で授業にかけられた。

おわりに

家庭科は自分自身が生活者であるとの自覚を持ち、生活事象や構造を分析する方法を習得し、教材化する能力と指導法を工夫する技能をもっている教師が担当するのであって、それは女性に限らない。また、家庭科の対象は、近隣からアジアの地域、全世界の人々と自然と共存・共生しながら、自分自身と家族が健康で快適な生活を実現するための知識や方法を学ぶのであって、それも女性に限らない。家庭科の共修が肩肘張らずに語られるような教材づくりと授業づくりに精を出そう。

(福岡教育大学)

* このシリーズは、今回で終了いたします。